スン
スン
ドクン
ドクン
ひく…
ひく…

「御館様はこういうのが好きなの…？」
「うん、……う」
水着を着たままの状態で私の谷間に彼のモノが挿入される。
御館様は腰を揺すり、肉棒を私の胸に擦りつけてうめき声を漏らした。
（御館様の、熱い…。それに、気持ち良さそう…）
これが普通なのかは分からないけど、彼が喜んでくれるなら別にいいかな、と思う。
肉棒が動く度に水着で抑えられている胸がぐにゅぐにゅと形を変えていく。それがまるで…、
「ん…、ぁ……」
（御館様のおちんちんに、胸を揉まれてるみたい……）

気持ち良さそうにしている御館様を上目遣いで見つめ、されるがままに胸を使われる。
暫くすると、私の胸に夢中になっていた御館様と視線がぶつかった。
「あ……、ご、ごめん。僕だけ気持ち良くなって」
「ん…、そんなことない。御館様にされることは、全部気持ちいい…、ぁ…」
何故だか御館様はごくりと唾を呑んで、肉棒の先からガマン汁を溢れさせた。
透明な粘液が彼のおちんちんに伝い、私の谷間にまぶされていく。
「はぁ…、あ…、御館様、なんだかもどかしそう…」
「そ、そんなことは…」
「遠慮しないで。私のナカと同じように、ぐちゃぐちゃにしていいから……」

ぬっぷ
ずぷ
ずぷ
ずぷ
ずぷ
ずぷ
ぬちゃ
ぬちゃ

その言葉が引き金になって、行為は激しさを増した。
「う、カシウス……！」
御館様のピストンがどんどん早くなる。
谷間を乱暴に掻き分けて動くおちんちんのせいで、乳首が水着に擦れてピリピリする。
「はぁ、は……、あ、ンっ」
（ヌルヌルになった御館様のモノ、擦られるの気持ちいい…）

見上げると、余裕のない表情をしている御館様が目に入った。
それがなんだか愛おしくて、お腹の奥が疼いてしまう。
「御館様……、ん……、ここと、膣内どっちが気持ちいい？」
「はぁ、く、比べられないよ…。胸に包まれてる感じが、すごく…」
「あ、ん…、私の膣内は……？」
「キツくて、うねってて、熱い、かな…」
もっと私の胸に夢中になってほしい。そう思うと、勝手に手は動いていた。

じゅぽっ
じゅぽっ
ぱっ
ぱっ
ぎゅー
むぎゅ

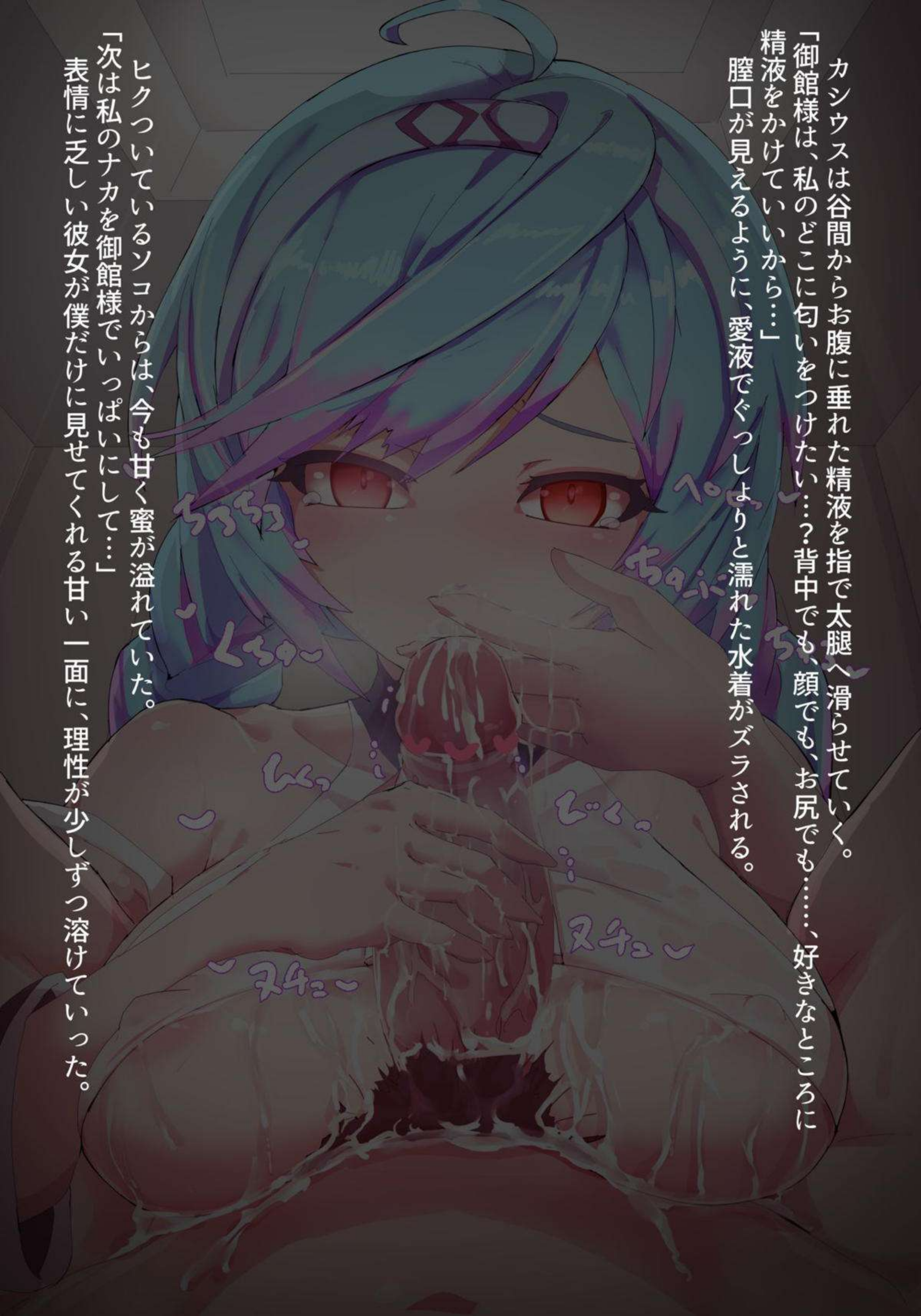
「御館様、こう…？ンっ」
「うあ…！」
胸を両手で寄せ、挟んだ肉棒に押し付けると御館様の腰が少しだけ浮いた。
擦りつけられる肌がさっきよりも熱くて、ズチュっズチュっと肉同士を摺り合わせて出る卑猥な水音が更に大きくなる。
「う、それ…！」
「あっ！、は、ぁ…、ぁ、ンっ！」
（いつも…、こんな風に、おちんちんが膣内に……）
下腹が熱くなり、淫唇から漏れた愛液が水着を濡らしていく。
どうしようもなく、身体が彼のモノを欲していた。
「ねぇ、御館様…、ん、ふ…、いつも私の膣内にするみたいに、乱暴に掻き回して…」
「カシウス！」
乳房を上下に動かしながら谷間をよせ、おっぱいまんこをうねらせる。
水着の中に出し入れされる肉棒が、胸の形を強引に変えていく。
「御館様…！おと、すごい…、ンっ、ビクってしてる、あっ！」
「出る…！」
彼のモノが胸に挟まれたまま、びゅるびゅると白く欲望を吐き出した。

ドクン…
ドクン…
ズ…
ズ…
ぢゅっ…
ぢゅ…
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ

ズチュっとカシウスの胸から肉棒を引き抜く。
彼女のパイズリはどうにかなりそうな気持ち良さだった。
「御館様の……、たくさん出て……、熱い……」
熱っぽく吐息を溢した彼女を見て息がつまる。
大事なところ以外が半透明の水着の中には、彼女の胸に大量の精液が溜まっていた。
谷間から少しずつ白濁液が垂れていく。

「御館様は、いつもこんな風に私の膣内に出すのね……」
白く透き通る肌をほんのり赤く染め、お腹を伝う精液を指ですくって舐めとるカシウスの姿はとても淫らで。
「ちゅ、ちゅぷ……、くちゅ……、ちゅぴ……」
指を咥えて、口に含んだ精子をカシウスは舌で転がしていく。
「こくっ……、御館様の精液、喉に絡まるくらいドロドロしてて、そのままじゃ飲み込めない……。
口の中が御館様の匂いでいっぱい……」

ちゅちゅ
ぺろっ
ちゅぱ
ちゅ
くちゅ
しこっ
ぐちゅ
ヌチュ
ヌチュ



カシウスは谷間からお腹に垂れた精液を指で太腿へ滑らせていく。
「御館様は、私のどこに匂いをつけたい…？背中でも、顔でも、お尻でも……、好きなところに精液をかけていいから…」
膣口が見えるように、愛液でぐっしょりと濡れた水着がズラされる。

ヒクついているソコからは、今も甘く蜜が溢れていた。
「次は私のナカを御館様でいっぱいにして…」
表情に乏しい彼女が僕だけに見せてくれる甘い一面に、理性が少しずつ溶けていった。

トクン
トクン
ぬぽ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

「カシウス、四つん這いになって」
耳元で囁かれて、バクバクと心臓が脈打つ。
「……こ、これでいいの？あ、あ…♡」
彼に言われるがままにベッドの上で四つん這いになると、膣内に彼のモノを挿入された。
「カシウス、気持ち良さそうだね」
「ひあ♡」
ばちゅん、と腰を打ち付けられただけで凄まじい快感に襲われる。

目が見えない分、彼の声とおちんちんをより鋭敏に感じてしまう。
「身体、今、敏感で…、ンッ♡」
「言ったよね？声が我慢できなくなるまで気持ちよくさせるって」
「ん♡お、おやかたさまっ…、ん、ふ♡ふぅ、ぁ♡」
彼のモノが私の膣肉を掻き分けて抜き差しされるのが直に分かる。
与えられる快感を必死に堪える為に口をキュっと結んでも、艶めいた息を零してしまう。

「きゃっ♡」
御館様に背中をペロリと舐められ。
「おやかた、さま…♡そこ、は…、ンっ♡はぁ、あ…♡」
爪先で乳首を掻かれ、お尻を撫でられ、恥丘をこねられ、思いもしなかった場所からの刺激に身体が敏感に反応してしまう。
「ま、待って…♡か、身体が何だかヘンで…、ひうっ♡〜〜〜っ♡♡」
触れられた場所に気を取られていると、唐突に膣奥を突かれて達してしまった。

「カシウス、声を聞かせて…」
「おやかたさま♡や、恥ずかしい…、んぅぅぅ♡」
イったばかりの膣にずぷりと肉棒を突き立てられ、甘い声が漏れてしまう。
「分かった。カシウスが我慢出来なくなるまで愛するよ」
「ンッ♡ま、待っ…、きゃぅ♡」
四つん這いの私に御館様が覆い被さり、耳をペロリと舐めた。

ん…ん…
ぴくっ
あっ
あっ
ぴくん
ぱちゅ
ぱちゅ
ぱちゅ

「耳、舐めたら…、やっ♡啄むのも…、ん♡ンッ♡」
耳を唇と舌で舐られながら、ナカを擦りあげられる。
「おやかたさま、耳に舌入れたら、っ♡エッチな音、響いて…♡あんっ♡あっ、ぁ♡」
耳穴に彼の舌が淫らな音を這い回り背筋がゾワゾワと震えた瞬間に奥を突かれた。
「やっと声を聞かせてくれたね。でも…、まだこれからだよ」
「あっ♡ぁん♡お、おやかたさまっ♡少し待っ…、ぁあああ♡」
私の声を遮るようにクリトリスをキュっと摘まれ、呆気なく果ててしまう。

目隠しをされて、手首を縛られて、御館様から与えられる快感に身体をくねらせて悶えるしかできない私は、まるで…。
「はぁ…、はぁ…♡わたし、おやかたさまに犯されてるみたいね…♡」
熱烈に求められている今の状況に、悦んでいる自分がいた。
(目隠しをしてて良かった。きっと今、だらしない顔をしてるから…)
この言葉が彼の欲情を煽ってるなんて、分かっていなかった。
「カシウス、もっと乱暴にしてもいい…？」
「うん…。御館様、私をもっと愛して…。もっとイジめて、めちゃくちゃにして…♡」

ぱちゅ
ぱちゅ
ぬっちゅ
ぬっちゅ
ぱん
ぱん
はぁ
ぴくっ
ぴくん

ぱちぱちぱち

欲望が沸き立ち、彼女の柔らかな唇を指でなぞっていく。
「指、咥えて…」
「ん…♡あむっ、ちゅぷ…、ちゅ…、んくっ♡」
中指と人差し指を唇で啄まれ、指先を舌で舐められる。
彼女の口とナカは生暖かく、ねっとりとした粘液が肉棒と指に絡んでいく。
「ンッ♡ふぅ、ふっ♡ん♡ちゅぷ、れぇる♡ンンっ♡」
イヤらしく舌を蠢かせ、はむはむと唇で啄むカシウスの口を指で犯した。

手首を縛り、目隠しをさせ、四つん這いになったの彼女の口と膣を同時に責め立てていく。
無理矢理犯しているような背徳感が肉棒を熱く滾らせた。
「おやかたさま、ちゅく♡もっと♡もっとして…♡あむ♡」
「…分かった」
「じゅく♡じゅっ♡ンッ、んぅぅぅ♡」
耳を甘く噛り、空いた手で乳房を弄ぶとカシウスの声が更に甘くなる。
普段の落ち着いた様子からは考えられないくらいに、乱れるカシウスはとても扇情的だった。

「ふぅぅ♡じゅ、ぢゅる♡ンッ♡ふぅ♡うっ♡」
腰を強めに打ち付けると、カシウスは鼻息荒く身を捩らせた。
「もっと強めにいくよ」
「〜〜〜っ♡♡♡んぅぅぅ♡ンッ、じゅぷ♡じゅるる♡」
彼女のナカを乱雑に掻き回し、陰核をグリグリと抓るとカシウスの身体が悦楽に震えあがった。
膣肉がヒクつきながら肉棒を締め付け、射精をねだってくる。

込み上げてくる快感に僕の方も限界だった。
「カシウス、出すよ…！」
「じゅ♡じゅぷ♡ふぅぅ♡ん、ンッ♡ンンんぅぅぅぅ♡♡」
ナカに大量の精液を注ぐと、カシウスは悶えながら絶頂の余韻に浸った。
肉棒を引き抜くと、膣口からドロリと精液が溢れ返る。

ドキドキ
スゥ スゥ
くんくん
ドキドキ

「ふぅぅ♡んぷ♡おやかたさまの、熱い…♡子宮にベットリ子種をつけられて、気持ちいいの…♡」
カシウスは縛られたままモゾモゾと身体をくねらせ、僕のモノに顔を寄せた。

「ねぇ、おやかたさま…♡今度は指じゃなくて、おちんちんを咥えさせて…♡すん…、ふぅ…♡」
四つん這いで肉棒に鼻先を擦り付けながら匂いを嗅ぐ姿はまるで犬のようで、恋人にそんな格好をさせていることに興奮が高まる。

ちゅぱっ!
ぬ…
ロっ…

「れる…♡れぇ…、くぷ…♡」
カシウスは僕のモノの形を確かめるように、竿にねっとりと舌を這わせ、唇で啄んだ。
「んぷ…♡おやかたさまの、おっきくて、硬くて、熱い…♡はむ…♡」
肉棒を咥える度にカシウスの唇が唾液と精液に濡れていく。
「あむ、んむ…♡」

「うっ…」
鬼頭を咥えられ、彼女の唇がカリ首を啄む。
敏感な所への刺激に腰が浮き、そして。
「あむっ♡ふぅ♡ふーっ♡おやかたさま…、わたしの口、おまんこみたいに犯ひて…♡」
「――――……」
鼻息を荒くして肉棒にしゃぶりついたままおねだりするカシウスの姿に、
理性の糸がブツリと切れる音がした。

「ンンッ♡じゅっ♡じゅぽっ♡ぢゅぷぷ♡」
カシウスに肉棒を咥えさせたまま、欲望に従い腰を前後に動かした。
竿に彼女の舌と唇が熱く擦れていくのが、堪らなく気持ちいい。
「ぢゅ、ぢゅぶ♡じゅっ♡じゅぼ♡んぅう♡」
「カシウス、すごくイヤらしい顔をしてる…！」
「じゅっ♡じゅぼ♡おやかたさまのおひんひん、おいひいの…♡もっと突いて♡
もっとしゃぶらひて…♡んぅ♡」

煽られるままにピストンを速めるとカシウスの口からじゅぷじゅぷと水音が鳴り響いた。
彼女の唾液が肉棒にまぶされ、竿を唇で扱かれる。
「じゅぶ♡じゅ♡ぢゅっ♡ぢゅぼ♡」
「うっ…、犬みたいな格好で、すごくエッチだよ…」
「じゅぷ…♡おやかたさまに愛して貰えるなら、犬でもいい…♡あなたのペットを
もっと躾けて…♡じゅぶ♡ンッ♡んぅう♡」
手首を縛りつけ、目隠しをさせ、四つん這いで肉棒を舐めさせる征服感に、
もう我慢の限界だった。

ちょっ
ちょっ
ちょっ

「じゅぶ♡じゅるる♡ぢゅるるるるるるるる♡ンッ♡ンうううううう♡♡」
肉棒を吸い上げられ、喉奥に直接射精した。
「んうう♡ンッ♡ふう♡ふう♡ちゅぽ…♡」

彼女の口から僕のモノを抜くと、鬼頭から彼女の唇へと何本もの白い粘液が引いていた。
「ふう♡ふーっ♡おやかたさま、もっと…♡顔でも、お腹でも、背中でも…、
もっと私に精液をかけて、匂いを染み込ませて♡」
誘うように尻を揺らして喜悦の表情を浮かべるカシウスは酷く性的で、
僕の嗜虐心をそそらせる。

ぴくん
ぐりぐり
ズッ
ぬぷぬぷ
ぬぷぬぷ
くちゅ
くちゅ

「エッチな子にはお仕置きだよ」
カシウスを押し倒し、股を開かせて蜜を滴らせる彼女のナカに肉棒を突き立てた。
「ンッ♡んぅう♡おやかたさまっ♡もっと♡もっとして♡きゃう♡♡」
淫らな声をあげるカシウスを、求められるままに犯していく。
肌を重ね、身体を擦りつけながら互いに愛し合った。

「あっ♡あっ♡そ、そこ♡おやかたさまの、お腹の裏側ごりごりして気持ちいいの♡」
「お仕置きで悦ぶなんて、カシウスはいけないコだね」
「〜〜〜っ♡♡♡」
硬くなった乳首を強めに抓り、とろとろになっているナカをぐちゅぐちゅと音を立てて掻き回す度に、カシウスは快感に悶えた。

びくっ
びくっ
あっ
あっ
びくっ
びくっ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ

それから数十分、何度もカシウスをイかせた。
「やああっ♡あっ♡あっ♡ま、待って、おやかたさま♡んぅ♡」
どんどん甘く大きくなる彼女の嬌声に、僕のモノは萎えるどころか更に膨張していた。
「だっ、ダメ…♡おやかたさまので、ずっとイきっ放しなの…♡だから…、ひぅ♡♡♡」

「ダメだよ。これはカシウスへのお仕置きだから」
「んぁ♡はぁ♡あっ♡あん♡ン、ううう♡♡♡」
涎を垂らしながら喘ぎ、快感に身体を痙攣させるカシウスを激しく求め続けた。